

- 平成13年度日本造園学会全国大会
生態工学分科会に参加して -

2001年5月28日 於 東京農業大学

生態工学における

雑木林と市民活動

私が生態工学に関わりを持つようになったのは、4年ほど前からである。これまでの生態工学の特徴は、自然環境復元や緑地ネットワークの技術に関する議論が色濃かったように思われる。しかし、今年度の生態工学分科会の特徴は、「雑木林に関わる市民が抱えている課題を取り入れて生態工学を発展させるとともに、生態工

学について市民の理解を深める」ということにあった。分科会では、「雑木林や自然公園に関わる市民活動家（ボランティア）が、今どのような状況・問題に直面しているか」ということを主なテーマとして議論された。今回は、様々な議論の中でも「雑木林の保全」について報告したい。

生態工学では、雑木林における市民の活動を次の4つの段階からなる『順応的管理』として捉えている。

目標とする雑木林を設定する
目標達成のための管理作業を行う
モニタリングを行う
管理作業や目標を評価し見直す

順応的管理とは、「変化していく自然の状態を注意深く見守りながら、それに応じて適切に管理する」という考え方である。

以下に示した事例は、ある公園をフィールドとする団体のカタクリ保全の要約である。

この一連の流れは、順応的管理に沿っていると言える。

目標設定
カタクリを増やしたい。

管理作業
ササ刈りや間伐を行う。

モニタリング
ササ刈りや間伐を行うことによって
個体数増加が実証された。

評価の見直し
花数や種子数のバラツキの原因解明

この事例は、カタクリに代表される具体的な目標種の保全を目標とし

ており、管理による環境の変化の様子が見てとれるので分かりやすい。

しかし、この「種の保全」から前進して、「雑木林全体の保全」となると難しくなる。「雑木林の保全」の管理手法を考えた場合、まず思い浮かぶのは「伝統的管理手法」の活用である。伝統的管理手法は、個々の地域の文化継承や地域生態系、景観保全に必要な不可欠な手法である。

ところが、近年の雑木林の活用形態の変化に伴って、管理形態は少しずつ変化しているようである。つまり、雑木林が農用的利用から多目的な利用へと転換していることが、活用形態の変化の要因につながっているのである。これらの諸問題について生態工学では、市民との密接な係わり合いの中から、目標の設定や手法を確立し、新たな道を拓こうとしている。

最後にボランティアに参加する市民は年々増加傾向にあるとの報告があったが、依然として若い力が足りないという問題もある。

我々は幸いにして、まだ若者と呼ばれる段階にあり、少なからずとも生き物についての知識も豊富である。緑地を取り扱う分野の技術者として、もう少し自分の身のまわりの緑地について真剣に考え、取り組まなければいけないと再認識した。

(本社自然環境調査室・井上 剛)

事例 - カタクリの保全

園内にはカタクリが生育しているが、ササに覆われているために、昔に比べて著しく個体数が減少した。このため、ササ刈りや木本植物の間伐を行って、光が良くあたるような適切な管理を施し、カタクリの個体数増加に成功した。さらに今年からは、管理作業とともにカタクリの開花数のほか、結実数、1つの実に含まれる種子の数等を記録している。この中で、種子数にかなりのバラツキがあることや、その種子の散布の行方などに興味を感じるとともに管理による影響などについての関心が高まっている。